

ポーランド8日間 感動の旅

2012・4・24～2012・5・1



第1日目＜4月24日（火）晴れ＞

◎成田からフランクフルトへ、そしてワルシャワへ

キンキンツアーの5回目はポーランドに決まりました。都合で参加されない人、新しく参加した人14名のメンバー。私たちは阪急交通社の「ポーランド8日間」のツアーに総勢30名参加しました。集合が早朝のため前日ホテルに泊まる人もいました。

添乗員は経験豊かな日和山登さん。9時45分発フランクフルトまでエアバス380型（2階建て総勢600名のジャンボ機）に搭乗し12時間飛行、そこで中型機に乗り換え1時間40分の飛行でワルシャワのフレデリック・ショパン国際空港に着く。

フランクフルトから乗り合わせた中国の要人とその随行員が同じ飛行機、室内は中国人の声高の談笑が少しうるさい、機内の案内も中国語が先、思いやられる日本の未来。

航空会社も激戦の中、サービスも行き届き食事のときは事前にメニュー表が配られる。イヤホン内の音楽もきれいな音、前面の画面でゲームをしたり、映画を見たり、時代とともに進歩してきた様に思われる。

ポーランドはサマータイム採用で1時間早い、日本との時差は－7時間。現地時間の9時頃、4ツ星の「ノボテル・ホテル」に着く。夕食は機内で済ませたので、明日からの観光を楽しみにして休む。

◎ポーランドどんな国、その歴史、文化、著名な人々

「ポーランド」とは「平原の国」という意味、農業が盛んな中央ヨーロッパに位置する共和制国家。北はバルト海に面し、北東はロシアの飛び地とリトアニア、東はベラルーシとウクライナ、南はチェコとスロバキア、西はドイツと接し、東西ヨーロッパを結ぶ交易路の中継点に位置し、この地の利がかえって災いし歴史上何度も諸外国の侵略や国土の分割の憂き目にあってきた。

面積は32万平方キロ（日本の85%）、緑あふれる大平原に無数の川や湖沼が点在し、南部のスロバキアとの国境地帯の2千メートル級の山が連なるタトラ山地は、ザコパネなど山岳リゾート地として親しまれている。人口は3800万人（日本の33%）、人口の50%は35才以下という若者の国で、若者の50%は大学を出て学位を取得している（日本は39%）。

緯度はサハリンと同じで、夏は夜も明るく冬は午後にはうす暗くなる。気候は、海岸部を除いて大陸性気候で、大地の木々が一斉に芽吹き、一斉に花をつける歓喜の季節。突如 日差しが強烈になり春から夏へと季節は駆け足でやってくる。連日、夏を思わせるような晴天続き、地元の人々は半袖姿、公園では水着姿で日光浴を楽しむ人、慌ててTシャツを買う人。

この国、ポーランドは10世紀、ゲルマン民族の圧力に対抗するため、ポラーニエ族（「平原の民」の意）が割拠していたスラヴ人の部族国家を統合して、国家として西欧キリスト教世界に認知されたのが始まりといわれている。14世紀から17世紀にかけて大王国を形成したが、その後衰退し18世紀には3度にわたり国土が隣国のロシア、オーストリア、プロイセンの3国に分割され、1918年に独立を回復するまで、123年間世界地図から姿を消した。第2次世界大戦では再びナチス・ドイツとソ連に

侵略され、国土が分割され、約 650 万人（人口の 5 分の 1）が犠牲となる世界最大の被害を蒙った。戦後、社会主義国として国家主権を回復、1989 年には自主的労働組合「連帯」などの運動が実り平和的に民主化を果たし、旧ソ連圏で初めての非社会主義政権を誕生させた。

1999 年に、「欧州への回帰」を掲げ N A T O に加盟、2004 年には欧州連合（E U）加盟、その存在感を増してきている。世界金融危機の中、2009 年の経済成長率は E U 加盟国では唯一、O E C D 加盟国では最高のプラス成長。輸出依存度が比較的低く、国内需要が大きいという経済的特徴を持つポーランドは、ヨーロッパでは最も高い成長率が期待されている国の一つである。現地通貨の 1 ズウッティ（Z L）は約 35 円。1 ユーロは約 100 円。

ポーランド人は西スラヴ系の民族で、主にカトリックを信仰している。同じスラヴ民族でも宗教の異なる東スラヴ系のウクライナ・ベラルーシとは文化的、言語的にも距離がありポーランド語はアルファベットを使うが、東スラヴ系の国ではキリル文字を使う。ポーランドは、文化的には、ローマ・カトリックとの繋がりが深いと言える。また、「音楽民族」といわれるほど音楽の好きな民族で、5 年に一度開かれる「ショパンコンクール」は世界的に有名である。

ポーランドは長く外国に支配された歴史があるが、国民はその支配と抑圧に激しく抵抗し戦った。そして国外に出て大きな功績を挙げた人も大勢いる。著名なポーランド人としてはフランソワ・ショパン（作曲家。ピアニスト）、マリー・キュリー（物理学者・ノーベル賞 2 度受賞）、ミコワイ・コペルニクス（天文学者）、ローザ・ルクセンブルグ（社会主義者）、コルベ神父（カトリック聖職者、アウシュビッツの聖者）、ヨハネ・パウロ二世（カトリック聖職者・第 264 代ローマ法王）、レフ・ワレサ（元大統領・ノーベル平和賞受賞）、アンジェイ・ワイダ（映画監督）などがある。

また、ポーランドは伝統的な親日国としても有名。ロシア革命時の混乱の中で当時の日本政府は、シベリアのポーランド孤児を救出し母国に送り届けた。また、ナチスの迫害からユダヤ民を救ったリトアニアの杉原千畝大使の「命のビザ」など、その恩義を忘れず今日でも親日感情が強く、日本語熱や日本研究が盛んとのこと。アンジェイ・ワイダ氏らの努力下、クラフクには浮世絵などの日本美術や技術を展示する「日本美術・技術センター」（マンガ・センター）が開設されている。現在では約 200 社もの日本企業がポーランドに進出している。

第 2 日目＜4 月 2 5 日（水）晴れ＞

◎ショパンの生家の博物館

「ピアノの詩人」と呼ばれるフレデリック・ショパンはポーランドの民族音楽を数々の洗練されたピアノ曲として生まれ変わらせた。ショパンが 1810 年に生まれた生家が博物館分室として公開されている。

そのジェラゾヴァ・ヴォラの町までバスで約 1 時間の道を、現地ガイドの案内で向かう。農村の道路沿いにはキリストの像・十字架・マリア像がある間隔で立ち並ぶ、日本における道祖神のようにも感じられる。電柱の上には大きなコウノ鳥の巣があり私たちを眺めている。ガイドいわく「鳥が安心して住めることは、いかにきれいな空気

かがわかるでしょう。」

車は交通事故を防ぐために昼もライトをつけて走ることが義務づけられている。

4月25日現在のガソリン価格が1リッターあたり200円の看板が目につく。生活費、月7万～12万の一般の人からみると車の経費は大きい。他のヨーロッパのようにアウトバーンは未だ整備されていない。しかし、教育費は無料、医療も無料。老人は家族と地域がみる。まだ老人問題は先のように思われた。

最初は記念館でショパンの生涯のDVDを見る。1930年以来フランスで過ごし、亡くなった1939年にはその遺言によって心臓がポーランドに持ち帰られ、ワルシャワの聖十字架教会に安置されている。生涯の最後の9年間フランスの女流作家ジョルジュ・サンドのもとで数々の名曲が作曲されたことなどが紹介されていた。公園の中にある質素な建物には、ショパンが生まれた部屋、幼少時に初めて作曲した時の楽譜の複製や家族の写真などが展示されている。売店ではショパンの関係グッズ、CDは無論、様々な品が売られている。

◎世界遺産ワルシャワ歴史地区 戦後の復興に託した国民の願い

その後ワルシャワに戻り、レストランでポーランド風カツレツの昼食後、ワルシャワ歴史地区の観光へ。ワルシャワは1596年にクラフクから遷都、人口170万人。第二次世界大戦の末期1944年8月、連合軍とソ連軍の支援を見込んだワルシャワ市民は、ナチス打倒のため果敢に蜂起したが、ヴィスワ川の対岸で待機するソ連軍の支援はなく、2ヶ月間の戦いの果て20万人の市民が犠牲になった。ワルシャワ蜂起記念碑の像は、その苦しい戦いを現している（アンジェイ・ワイダは映画「地下水道」でこの戦いを扱った）。その後のドイツ軍の3カ月にわたる報復攻撃で、「北のパリ」と言われたヴィスワ川左岸は灰塵に帰したのである。

戦後、跡形もなく徹底的に破壊尽くされた首都を前に、国民は、自分たちが育んできた時間と暮らしが刻まれた戦前の姿を復元する道を選択した。民族のシンボリック建築の復元に、約40年の歳月をかけて取り組み、「壁のひび一本に至るまで」忠実に再現し、不死鳥のようによみがえったワルシャワ旧市街は、1980年世界遺産に登録された。保存価値を重視する世界遺産では異例のことで、人々の「記憶」と「おこない」そのものに尊さを見出す世界初の世界遺産となった。

私たちは、露天画商やカフェ、本屋やみやげ物屋が並ぶ旧市街広場からバルバカン（バロック様式の半円筒型の砦）、観光客でにぎわう王宮広場、ショパンの心臓が安置されている聖十字架教会などを回る。驚いたのは旧共産党の本部が今では証券取引所として使われているとのことだった。

その後、室内で「ショパンのプライベートコンサート」を聴く。ノックターンから始まり、ワルシャワ音楽大学教授のピアノを弾く見事な手さばきに見とれながら、巧みな演奏に聴き入ってしまった。

浜松市が姉妹都市として提携を結び、交友を深めている。

◎列車でクラフクへ

ワルシャワから列車に乗りクラフクへ3時間の旅、2等列車なのに6人のコンパートメント、車窓から春の田園風景、青い麦畑と黒い大地が模様をなして続き、どこまでも富良野のような景色が続く、木々が輝くように小川に写り、丘に建つ家々はつましくも同じ形で均整がとれて、まるで絵本をみているような光景、どこをみても絵になるアングル、教会の塔があるところには集落がある。

7時半クラフクに着く、クラフクは人口75万人のポーランド第2の都市、第2次世界大戦の戦火を免れ、中世のままの街並みが残されている。1978年に旧市街全体が世界遺産に登録された。郊外には、世界遺産アウシュビッツ、岩塩採掘場ヴィエリチカがある。その夜はショパンホテルに泊まる。

◎ポーランド料理

旅の楽しみはその土地の料理、ポーランド料理はロシアとドイツの料理の影響が特に強い。特別な料理ではなく素朴な田舎料理が多く、基本的な素材は、ポテト・人参・キャベツ・玉葱・きゅうり・トマト・きのこ類・ソーセージ・肉類、魚は 鮭・たら・鰯、鯖など。ポテトはパンと同じく主食。ライ麦の栽培に適していることから、香りと少し酸味のあるパンは種類も多くよく食べられている。

「第1の食事」といわれるスープは赤いビーツのスープ・豆のスープなど、どれも美味しいメインデッシュ、「第2の食事」は細かいパン粉をつけたカツ（肉、魚）やハンバーグ・野菜の肉巻き・ポーランド風餃子、肉料理を長い時間煮込む物。味は香辛料を使い比較的薄味が多い。ポーランド人の多くは母親の作る料理こそ世界一おいしいと思っているとか、私達も抵抗なく家庭料理を楽しんだ。

果物はりんご、ピーチ、チェリー、イチゴの産地。リンゴのジュースは特に美味しい。輸出もされている。

第3日目＜4月26日(木)晴れ＞

◎世界遺産 国立アウシュビッツ博物館・ビルケナウ強制収容所



人類の負の遺産として世界遺産に登録されているアウシュビッツ強制収容所の見学。

私達を案内してくれたのは、中谷剛さんという40代半ばの日本人の方。彼は30才の時、このポーランド国立アウシュビッツ博物館の唯一の日本人公式ガイドとなった人で、通訳・翻訳家でもあり「アウシュビッツ博物館案内」など多数の著書もある。1991年より永住許可を

取り妻と息子2人の家族とともに、オシフィエンチム（ドイツ名ではアウシュビッツ）在住。彼の抑制された、静かな声がとても印象的でした。

「アウシュビッツ博物館が強制収容所の歴史に関する展示を本格的に開始したのは1955年から。それ以来、一般訪問者の見学コースも、展示物も、基本的に変わっていません。それは当時の物をそのまま公開するという基本方針に支えられています。

展示物に関する説明が比較的少ないのも特徴で、当時の実情を見て、肌で感じたことを次世代に伝えて欲しい。個人で使用する目的ならば館内の写真撮影も制限はありません。忘れてならないのは、この敷地の中で当時 100 万人をはるかに超える数の人々が亡くなったということです。アウシュビッツ博物館は、歴史を知るための手段である前に、犠牲者の冥福を祈る『墓石のない墓標』なのです。そのことを毎回確認しながら案内を始めることにしています」

1940 年にナチス・ドイツによって設立されたこのアウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所は、ヨーロッパ各地に作られたもののうち 191 ヘクタールもの広さ（東京ドーム約 50 個分）を持つ最大級の施設で、1945 年 1 月ソ連軍によって解放されるまで、ヨーロッパ各地から 110 万人のユダヤ人や、ロマ・シンテイ、ポーランド人、ソ連軍捕虜など合計 28 の民族の約 130 万人が連行され、ユダヤ人絶滅計画に基づき、その殆どの人々がそこに到着後すぐガス室に送られて殺され、また生きている間は、強制労働と恐怖に押しつぶされ、そして亡くなった。

収容所の構内では、収容者が植えた時は苗だった柳が 60 年経って大木になり、若葉を一杯付けていた。貨車の引き込み線のある門には、何度も映画では見た「A L B E I T M A C H T F R E I（働けば自由になれる）」とのスローガン、見渡す限り続く有刺鉄線とその支柱、28 棟の収容所をはじめ、SS（親衛隊）の管理棟、厨房や監視塔など 58 棟の施設には、最大 2 万 8 千人が収容されていた。4 号棟には、チクロンBの毒薬の空き缶の山、収容者の髪の毛 1950Kg の山、5 号棟には、収容者のトラंक 3 万 5 千個、靴 4 万 3 千足、食器、子どものおもちゃ・人形、メガネなど。そして収容された芸術家が密かに描いた 2000 点近い絵、その一部が北杜市のフィリア美術館にある。6 号棟には、つぶらな瞳の子どもたちの写真、そして、18 号棟の前には、自ら進んで犠牲となったコルベ神父の囚人番号の碑、こうしたものは息をのまずには目を向けられないものであった。

アウシュビッツ第 2 収容所としてのビルケナウは、敷地面積 140 ヘクタール、1944 年に鉄道の引き込み線が完成、その時ハンガリーから 43 万人のユダヤ人が連行された。ここで殺された人の 30%は女性で、20 万を超えた子どもたちは 14 才に満たないと、母親と一緒にガス室に連れていかれた。最大 9 万人を超えた収容者は、コンクリートに麦わらを敷いた所に、何十人も押し込められ、隣の人と尻を接しながらのトイレの穴には 30 秒しか座ることが許されなかったという状況は、人間の尊厳を徹底的に破壊するためのものなのでしょう。

奇跡的に生き残った人たちの運動もありポーランド国会は、1947 年強制収容所跡地を国際的な「受難の地」として残すことを決定し、1979 年には人類の「負の遺産」として世界遺産に登録された。

この数年間はアウシュビッツを訪れる人々はいなぎ上りで、最近は年間 100 万人を超えておりポーランド人が約 35%と多いが、ドイツ、アメリカ、イタリア、フランス、イギリス、イスラエルなど国外からの訪問者がその倍となっているという。日本からの訪問者は隣の韓国の半分にも及ばない約 7 千人余といわれている。ポーランドやドイツからは若者の訪問が多く、訪問者総数の半分を超えている。

中谷氏は、「ナチスのヒットラーは、デマや策略を弄したとはいえ、民主主義のシ

ステムの中で、独裁政治を確立し、他国を侵略し、多民族を抹殺する戦争に突き進んだ。当時の多くのドイツ人が、自分の小さな利益のために、それを見て見ぬふりをし、傍観していた事は、ないのか」と述べ、かつての西ドイツの大統領ヴァイツェッカーの「過去に目を閉ざす者は、現在についても盲目となる」との発言を引用しました。

今ヨーロッパでは2度にわたる世界大戦を踏まえて、国際協力で歴史教科書を記述していこうという動きがあるという。いまだ現在進行形の課題だが、ドイツとポーランド、ロシアとポーランドなど各国間で話し合いが続いている。日本でも、現在の社会に対する不満が、大阪や名古屋の首長の流れにのみ込まれる事を心配しつつ、日本の過去を正面から見つめる国民的討論が必要だと痛感した。その日の夕食後の交流会で、自らの生きざまを振り返る真剣な感想を交わし合った。

◎世界遺産クラフク歴史地区



ポーランド王国の全盛期だった 1386 年から 1572 年ヤギェウ王朝の時代にクラフクは王国の首都で 600 年以上中央ヨーロッパの文化の中心として栄えた街で、日本の京都ともいわれている。

16 世紀初めにルネッサンス様式で建てられたヴァベル城は、歴代ポーランド王の居城で、城内には大聖堂や旧王宮などがある。歴代王の肖像画や

家具丁度品、140 枚もの巨大なタペストリーがあり、王国の全盛期を物語っていた。街の中を白馬の馬車が観光客を乗せてゆっくりと走り、ヨーロッパ屈指の広さを持つ中央広場には、カフェやカラフルな花屋、みやげ物屋などが目白押しに並んでおり、観光客や地元の人で賑わっていた。

子どもたちに「ジェーン・ドブルー（こんにちは）」と挨拶したら、「ヤポンチキエム（日本人）だ」と歓迎され、記念写真を撮っている仲間もいた。

この広場の中央にある織物会館（織物取引所）では、予想外の暑さで、Tシャツや帽子を買う人もあり、一気に夏モードに変身していた。

中央広場の東にある聖マリア教会は、1222 年に建てられたゴシック式の美しい建物、構造は左右非対称で内部の祭壇は 12 年かけて作られた木造彫刻で国宝に指定されている。聖堂内の芸術品は美しく全体がブルーでまとめられ金色とブルーの輝きは、美しさと荘厳さを醸し出す。毎正時に塔の上部の扉が開き、トランペットが聞こえる。

◎楽しかった懇親会（参加者の顔合わせと誕生日のお祝い）

夕食の後に、ホテルの狭い部屋に 14 人の仲間が集合して、顔合わせの懇親会。団長の挨拶のあと、今回新しく参加された方が自己紹介し、前回の旅行時に誕生日のお祝いをしてもらった方から、「あの時は、とても思いがけないことで言葉に表せないほど感激しました。あれ以来、毎年の自分の年を忘れられなくなりました。今回旅行中に誕生日を迎える方はいらっしゃるようですが、旅の後すぐに迎える方が二人おられ、その方にチョコレートのレイを差し上げたいと思います。皆さんでお祝いをしようではありませんか」との提案があり、皆でお祝いの乾杯をして喜びを分かち

合った。その後、皆から出てくる言葉は、どうしてもアウシュビッツの感想になり、真剣な話し合いになりました。その中で「こんな風に、真面目に話し合えることが、幸せだなあ」という雰囲気、この仲間は他に代えがたいものとお互いに実感があった。

第4日目＜4月27日(金)晴れ＞

◎世界遺産ヴィエリチカ岩塩鉱

今日は真夏の気温 28 度、ポーランドの四季は二つしかないようだ。ポーランドの国家経済を支えつづけた「塩」この塩を採るヴィエリチカ岩塩鉱は国家事業として 700 年間採掘された、その総延長は 300 km、蟻の巣のように複雑に延びた地下迷路。観光客はエレベーターで下り地下 64m～325m にわたって複雑に入りこんだ採掘現場約 2.5km を見学出来るようになっており、ユネスコの世界遺産に登録されている。

ボレスワ王と結婚することになったギンガ姫が、住民に地面を掘りおこすように言うと、そこから塩の層が発見された。岩塩で出来ているキリストの像、小人の像、採掘工の像、コペルニックスの像、ヨハネパウロの像、など様々なものがある。

ギンガ礼拝堂は総てが岩塩でできている。透明感あふれるシャンデリア、最後の晩餐のレリーフなどは、絵画にも勝る巧みな芸術、礼拝堂は今も祈りの場、結婚式場として使われている。

塩を運ぶために馬を地底に下ろすための設備、塩を運ぶトロッコ、地下水を溜めた地底湖。一日の労苦を和らげてほしいとひざまずく教会がたくさんあったとか。

厳しい仕事にはキューバのようにアフリカの奴隷を使った。ここは世界の要人も見学するという。勿論、キュウリー婦人もショパンもヨハネ・パウロ 2 世も訪れた所。

地上に戻りレストランで食事のあとアウトバーンを 100 km 以上走り、山岳リゾート地ザコパネに向かう。ポーランドの高速道路は無料で、農業用のトラクターから、サイクリング車までいろんな車が走っている。運転手は狭い道を巧みに運転するが、交差点は円形のサークル状になっているので事故も少ないのかもしれない。

◎ザコパネ 山岳リゾート地



ポーランド最南部、スロバキア都の国境地帯にそびえる 2000m 級のタトラ山脈の麓にあるザコパネは貴重な山岳リゾート地である。一帯にはザコパネ様式という木造建築が美しく立ち並び、東京の原宿の様な賑わいを見せるクルブキ通りを通り、1983 年に建立の小さくてかわいらしい木造教会にむかう。

残念なことに清掃中で内部は見学できず、隣接の著名な人々の共同墓地に寄る。日本と違い個人のお墓には、色とりどりの造花が添えられ、ローソクの入ったガラスのランタンが墓前に置かれている。11 月 2 日の「死者の日」はさぞ美しいと思われる。

その後、自由広場（路上マーケット）に寄り、ザコパネスキー場の傍にある唯一の大きな「メルキュールホテル」に午後 7 時に到着。

テラスからの光景は、ゲレンデに残雪が残り、スイスの高原のような牧歌的風景、後方にはスロバキアの山々が連なり、山頂には、とてつもなく大きな十字架が建ち、村民を見守っているかのよう、前方にそびえる山は南アルプスや甲斐駒に似て見える。美しい春の山岳に喜びと歓声、シャッターの音が絶え間なく響く。

ザコバネの人口は2万8千人であるが、スキーシーズンには3万人以上の観光客が訪れ、軽井沢の気候に例えられている。

旅もあっというまに終りに近づく。明日はデンプノとワニットに立ち寄りザモシチに向う。

第5日＜4月28日（土）晴れ＞

今日も暑いなかバスで400 km以上走りデンプノとワニットに寄った後、ザモシチに

◎世界遺産デンプノ大天使ミカエル教会

テンプル騎士団によって16世紀に建立。カトリックでは聖ミカエル・聖ガブリエル・聖ラファエルの三大天使を祈念する。祈りの対象ではなく祈りの取次ぎを願う。夫々の教会はカトリック信者（日本のカトリック人口は1%）には重要な所かもしれないが、ガイドも日本人には丁寧な説明がない。

あどけない、少年が走ってきて籠に入れたチーズを売る。思わず皆が買ってしまう。

◎ワニット城



1600年代当時のポーランドの公爵が建てた城、外観の美しさはポーランド随一。内部見学を予約していたのにも拘わらず結婚式で入れず、隣接のヨーロッパ随一といわれる馬車コレクションを見る。旅行用、スポーツ用、儀礼用など何十台もの馬車のコレクション。その他馬具や当時の旅行用品などおもしろかったが写真禁止で残念。

時間があつたので庭（公園）を散策、様々な鳥がいるようだ、草原に飛んできた鳥は白と黒のコントラストが鮮やかなカラス、これはニシコクマルカラスという。日本の様にカラスは黒とは限らない。

夕方、ザモシチに到着。ホテルでの夕食後、今回の旅行も終わりに近づいた最後の懇親会は、ズブロッカで大いに盛り上がり、ポーランド会話集の最後のページのポーランド民謡「森へ行きましょう」をみんなで歌う。

第6日目＜4月29日（日）晴れ＞

◎世界遺産ザモシチ旧市街　　ザモイスキーによる街づくり

ポーランドの東部に位置するザモシチは、1580年に貴族ヤン・ザモイスキーが建設した町、彼はイタリアに留学し、クラクフを超える理想の都市を建設しようとした。イタリア人建築家ヘルナルド・モランドに依頼、宮殿・市庁舎・武器庫・教会・石造

りの集合住宅に至るまで一任した。1580 年何も無いところから 20 年間でルネッサンス様式を模した街並みを造りあげた。後期ルネッサンス建築が完全な状態で残っている。大砲が使われ始めた時代に建設された要塞で、函館の五稜郭のように星型の要塞都市。

宿泊したラディソン・ブルホテルに隣接された広場には、それを囲むように後期ルネッサンス様式の建物がある。中央に市庁舎があり今は野外音楽ホールとして正面の階段が使われている。騙し絵の建物、周りにはコーヒーショップ、土産品売り場がある。聖トマス大教会には徒歩で行く、丁度日曜日で 10 時のミサが始まろうとしていた。大人も子供も正装して教会に集まる。

街の中は、観光用の馬車が時を忘れさせるかのように人々を乗せて行く、男性も女性も混血でのせいか美しい人が多い、観光後 130 Km 離れたカジミエーシュードルニィに向かう。

◎聖ヤン教会

バスが入れないような住宅街の細道を進むと聖ヤン教会に着く。聖ヤン教会はあいにく工事中、教会前の広場はバザールのように両側に店が立ち並び、おまつり騒ぎ、似顔絵を描く人・絵を売る人・骨董屋などを見ても楽しい。観光後ワルシャワに戻る。

途中、ルブリンの近くで、アウシュビッツ、ビルケナウに次ぐ規模のマイダネク強制収容所の跡地に「平和」と言う文字を大きく形づくった記念碑を訪ねる。ここでも 1 日に千人ずつ焼かれたといわれ約 8 万人のユダヤ民が亡くなった。

最後の夜はオプションの「民族音楽とポーランド料理の夕べ」に全体で 10 人が参加(当グループから 5 人)

オプション不参加者は夕食がつかず、三々五々とホテルを出る。近くの日本料理店に行く人や、夜の街を歩く人、トラムに乗る人、リーズナブルでよい店はないかと、地図をみながら歩く人達、やっとたどりついた店が「民族音楽とポーランド料理の夕べ」の店だったとか、日曜日は安息の日なので開店している所はほとんどない、これは偶然で仕方のないこと。

オプションで来た人は正面の席で民族音楽と踊りを楽しみ、また舞台にあがり歌を共に歌い、ゲームで笑いを誘っていた。オプションの値段のうち旅行会社に入る値段が大きいことを聞いて少し驚く。

ポーランド最後のホテルは 5 ッ星「ラディソン ブル ソビエスキー」明朝は早いので、早々とベッドに入る。

◎ユダヤ教とキリスト教

ユダヤ教は、キリストが生まれる前までの旧約聖書を重んじる教えで、当時の天災、疫病など神の罰と結びつけていた。子どもの教育には非常に熱心である。ユダヤ教の環境で育った世界的な著名人は数多い。

キリスト教は、イエス・キリストが、神のメシア（神から遣わされた者）として誕生してからのこと。生活の原点に聖書を置いている。12 人の弟子によって書かれた聖書は全世界の人々に読まれ、世界 1 のベストセラー、日本でも年間 600 万冊売れている。

第7日目＜4月30日（月）晴れ＞

◎ワルシャワからフランクフルトへ、そして成田へ

早朝にホテルを出てワルシャワ飛行場に向かう。手続き後、出発までの時間、ここでしか使えない通貨ズロチで買い物をする。定刻にルフトハンザ機は9時50分離陸しフランクフルトに向かう。乗り継ぎ点のフランクフルト飛行場のベンチには大勢の日本人観光客。LH-0710機はジャンボ機で空席もあり、ゆったりと座れ、面前の画面を見ながら、旅の余韻を楽しみながら帰途に着いた。

第8日目＜5月1日（火）晴れ＞

成田に朝8時到着。短い行程でしたが、素晴らしい8日間の旅に感謝！

以上



+ 2 名

参考文献 アウシュビッツ博物館案内（中谷 剛）。
ユダヤを知る辞典（滝川 義人）
ポーランドを知るための60章（渡辺克義、明石書店）
アウシュビッツ・ビルケナウその歴史と今（公式ガイドブック）
地球の歩き方中欧編（ダイヤモンド社編）

2012年6月

編集 キンキンツアーリスト編集室

10／10